



平成30年5月31日(木)

藤 棚

第354号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

我が国最大の問題としての少子化

校長 小川義男

人口が減少しつつあります。地方の田園が崩壊、若しくは消滅しつつあります。

私は18歳の時、高校を出ると同時に、北海道の湯(ゆ)内(ない)という部落に、中学校英語教師として着任しました。駅から歩いて5キロという山奥の学校でしたが、120人の生徒がおりました。今、そこに住んでいる家は、只一軒です。二軒あった店もなくなりました。チラチラ見えていた夜の灯火もすっかりなくなり、月がない晩などは、文字通り「鼻をつままれても分からない」真の闇です。駅もなくなりました。線路もありません。このように田園が減り去り、一部都市のみが不夜城の星を為しているのは、考えてみれば空恐ろしい話です。

都会は田舎に支えられているからこそ、ネオンきらびやかに繁栄し続ける事ができるのです。このように田舎が減り去って、都市のみが栄えるという状況で、地震その他の天変地異が起こった場合、都市は生き延びることが出来るでしょうか。

関東地方でも、大規模地震が近づいていると言われます。富士山の噴火も近いものと、学者は判断しています。関東は、他の地域の災害を支援することは出来ても、関東地方が崩壊した場合、これを支援できる他地域はないのではないかと、私は心配しています。

都市のみが不夜城の如き、繁栄を続ける事ができるのは、それを支える田園が存在するからです。

フランスは、何かと政情不安を、否定できない国ですが、それでもフランスが安定しているのは、フランスが農業国だからです。あの広大なフランスの田園に接したとき、私はフランスの本当の偉大さを実感しました。

我が国、田園荒廃の最大の原因、それは人口減少にあります。

フランスもイギリスも、若年人口の多いことが報告されています。ですから、両国共に家賃は極めて高く、地価は上昇し続けているのに「バブルの崩壊」が起きたりはしないのです。

今すぐ、国家最大の問題としての少子化傾向の解決に取り組まなくてはなりません。仮に、子供が一人しか生まれないとすれば、やがてその子が結婚するときには、新郎と新婦が、合わせて二件の家を相続することになります。不動産(土地と建物)の価格が暴落するのは当たり前の話なのです。

夏目漱石の家は大金持ちでしたが、子供は八人でした。八人もいたら、親も、一々面倒を見たりすることは出来ません。勢い、年上の子供が年下の子供の面倒をみる事になります。親も「兄や姉」に、育児の責任の相当部分を任せ、一番幼い子供や、その直ぐ上の子供の面倒をみることに、力を入れなくてはなりません。親も賢くなるし、子供も健康に育つのです。

昔は、背中に弟妹を背負って(おんぶして)遊ぶ子供の姿が、ごく当たり前でした。このようにして、「親も子も」育ったのです。

近頃は、政府が先頭に立って、「女性の職場進出」の重要性を強調します。でも、それは本当に正しいのでしょうか。育児、家政における女性本来の価値、力量は、そう簡単に否定し去って良いものなのでしょうか。

漬け物 酒 味噌 醤油、考えてみれば、旨い物はすべて酵母で出来ています。そのような酵母に基礎を置く日本料理の良さのほとんどは、女性の社会進出の名の下に滅び去って行ってしまったのではないのでしょうか。

古いが「良妻賢母」という言葉がありました。これを「古い」として捨て去ることに一理はあるのですが、私は、「盥の水と一緒に、赤ん坊まで流し去ってしまう」危険はないのかと、心配になります。

政府は「少子化対策」を口にしますが、ものになった試しがありません。少子化傾向は、ますます深刻なものになりつつあるのです。田園が滅びるとき、都市も又、確実に崩壊するのだという事実を、明日、国家を担う中、高校生諸君には、理解しておいて頂かねばなりません。

少子化の最大の原因、それは誰もが学習塾に通うようになった社会慣習にあると思います。ひとり、年間 60 万円の支出は、少子化最大の原因です。文部科学省に、これを憂慮する傾向は全くありません。

次に憂慮すべき問題は、晩婚化、結婚忌(き)避(ひ)の傾向増大にあります。

個人的にヨーロッパへ飛んだとき、双子を抱えたお母さんが乗り込んできました。日本人です。席を二つ取り、お母さんは、時にむずかかったり、泣いたりする赤ん坊と「格闘」していました。私は時々目を覚まして様子を見ていたのですが、お母さんは、ロンドンに着くまで、一睡もしなかったようです。若いお母さんでした。私は「若くなければできない仕事だな」と、心の奥底深く、ひそかな感動を味わいました。

出産、育児には体力が必要です。できれば 17,8 歳の体力旺盛なときこそ、出産に最も適しているのです。

女性のほとんどが大学に進学します。卒業するときには、すでに 22 歳です。就職し、仕事に慣れてからと思ううちに 30 を過ぎてしまいます。

これについても、様々な対処法はあります。私は大学時代の結婚、出産が可能なように、国家全体の態勢を改善することも、ひとつの方法だと思います。

結婚制度があるから、人類が存在するのであって、婚姻の重要性は、もっともっと強調して行かねばなりません。子供を抱える若い母親の職場進出が可能になるよう、政治そのもの、社会体制そのものを変える必要もあります。

その一方で、家事、家政に専念する妻、母親の存在の、社会的意義の大きさも忘れずに強調して行かねばならないと思います。結婚してから大学に行くというのも悪くないと思います。

田園の荒廃は国家を滅ぼします。それを防ぐには、少子化を防がなくてはなりません。生徒諸君には、結婚の重要性について、改めて認識を深めて頂きたいと思います。